

最後の日々

——アラン・フルニエとシャルル・ペギー——

鈴木正昭

- 〈目次〉 §1 始めに
§2 戦争への道のり
§3 最後の年

§1 始めに

今年（1995年）は第二次大戦終了後50周年の節目の年にあたり、テレビ、ラジオをはじめ新聞、雑誌等では戦争に関連する番組や特集がなされ人々の関心を引きつけた。また戦後50年を記念する様々な行事が国の内外を問わず各地で行われた。「戦争の風化」が叫ばれるようになって久しいが、今年は前半に起こった異常な事件（阪神・淡路大震災やオーム真理教事件）の影響もあったのだろうか、人々の関心が戦争という最大の異常事件に対してもいつになく敏感に反応したように思われる。

国会では戦争を引き起こしたことについての反省と迷惑をかけた周辺諸国へのお詫びを表明する決議がなされた。連立与党の中でも自民党と社会党の大戦に関する認識に大きな隔たりがあったため、妥協点を見いだすことが困難で多くの協議が繰り返された。難産の結果まとめられた妥協案は、責任を明確に認めたか否か判然としないという評価が多かった。しかも野党の欠席の中で決議されるという始末で、一層日本の誠意に関して諸外国に疑念を抱かせる結果に終わったのは残念なことだった。「こんな決議案ならしないほうがよかった」という酷評までくわえられたほどである。まだまだ戦争の評価についての国民的なコンセンサスが得られるまでには時間が必要であるように思われる。日本と戦い多くの犠牲を強いられた諸国の政府や国民から反発や不満の声があがったのは当然である。村山首相は総理見解として、もう一步踏み込んだ反省と謝罪をおこなったが、これについても、これは首相の個人的見解にすぎなく、日本政府の公式な見解ではないという印象を、被害を被った国々の政府や国民は持ったように見受けられる。

第二次大戦とは直線の関係はないものの、今年の夏は戦争に関わる大きな事件がほかにもいくつかマスコミを賑わしたのは記憶に新しい。

一つは、フランスのムルロア環礁での核実験の話題である。日本政府やオーストラリア、ニュージーランドおよび南太平洋諸国の度重なる要請にも

かかわらず、シラク大統領は実験を強行した。1995年9月15日現在、まだ実験は一度しか強行されてはいないものの、フランス政府は合計7ないし8回の実験を予告している。今後世界各地の反応如何によっては実験回数が少なくなるかもしれないとシラク大統領は語っているものの、これから1996年にかけて数回の実験が繰り返されるわけである。EU内部ではドイツが比較的フランスの実験に同情的である他は、批判的な国々が多いように見受けられる。とりわけスウェーデンでは、フランスからの輸入品の不買運動がかなり盛り上がり、フランスワインの売上高は、1995年8月に関しては例年の半額にまで落ち込んでいるそうである（1995年9月15日付朝日新聞朝刊）。

日本でも武村大蔵大臣のタヒチ島での抗議活動への参加は、マスコミ各社が大きく扱っている。同氏の「クレージー」発言にはフランス政府もかなり神経をとがらせたようである。さらに、各国の議員達とともに抗議船に乗り込んで立入禁止海域に侵入し拿捕された新党さきがけの二人の議員達の行動も詳細に報道された。それに対してフランス政府も、「内政干渉である」と神経質な反応を示している。実験場から近い南太平洋諸国が実験に抗議するのは当然のことであるが、その抗議活動も従来よりは激しいものがあるようである。

冷戦時代の核実験に対する反応とは異なった態度を、多くの国々がとるようになってきていることは明らかである。核兵器を所有する国々は、来年度全面的核実験廃止条約が締結されたからといって核兵器を直ちに廃棄するわけではない。それどころか科学技術の進歩のスピードは恐るべきもので、実際に爆発させなくとも、コンピュータのシミュレーションにより、実験室の中で実際に爆発させたのと同様の結果を得られるとのことである。今回のフランスの実験も、そのための基礎データを得るための実験であり、来年以降も実験室の中でさらなる性能の向上を目指した実験が積み重ねられるのであろうから、我々が核戦争の恐怖から解放されるのは、まだまだ遠い未来のことと言わねばならないだろう。

沖縄で9月に発生した駐留米軍の3人の兵士による少女への暴行事件も、国民の大きな関心を引き、9月末現在も引いている事件である。暴行事件自体は必ずしも希な事件ではない。この事件がこれほどまでに大きな関心と呼んだのは、やはり冷戦の終結と、それにもかかわらずいつまでも居座る冷戦時代の遺物に対する沖縄県民の、そして日本国民のいらだちがあるのではないだろうか。アメリカ側はクリントン大統領以下国務長官、国防長官、駐日大使などの政府高官が繰り返し遺憾の意を表明したけれども、日本国民の間にはまだまだ大きなわだかまりがあるように思われる。とりわけ日本国民にやりきれない思いをさせているのは、れっきとした独立国でありながら犯人を起訴するまで日本側は犯人を拘束できないという、安保条約の中の「地位協定」なるものの存在である。多くの国民は、こうした事態を見て、幕末に欧米各国との間に締結されたいわゆる不平等条約を思い出して、屈辱感に苛まれているのである。

もう一つの大きな話題は、リビチ・郁子さんをめぐるニュースである。彼女は農業研修生としてスイスに留学中に、旧ユーゴスラビアから彼女同様研修にきていた青年と知り合って結婚した。しかしながら平穏な日々は長続きしなかった。居住地が内戦に巻き込まれ、各地を難民として逃げまどわなければならなくなった。戦乱の中で夫は流れ弾にあたり死亡した。彼女は子供達を連れて各地を転々と避難した。無事日本に帰ることができたのは、ある日本人カメラマンと偶然知り合いになったからだった。このカメラマンの熱心な働きかけで、日本の外務省も重い腰を上げて、やっと彼女の帰国が実現したわけである。

東西ドイツが合併し、旧共産圏の国々が次々崩壊したのを見て多くの人々は、今度こそ本当の平和が実現するものと期待した。しかしそれから数年間の事態の推移は、そうした人々の期待を必ずしも満足させるものではなかった。崩壊前は共産政権の鉄の規律で押さえられていた民族的、宗教的な対立が各地で火を噴き始めたからである。

民族的、宗教的対立と言え、我々はそれ以前はまざイスラエルとパレス

チナのそれや、英国と北アイルランドのそれを思い浮かべるのが普通だった。もちろん実際はそれのみではなく、多民族、複数宗教が混在する国や地域では、多かれ少なかれ同様の問題に直面していたし、現在もいるに違いない。しかし一般にこうした問題とさえ、上に挙げた二つの事例を思い浮かべる人が多かったのではないか。

幸いなことに、これからもまだ紆余曲折はあるだろうが、これらの地域では問題の解決にかすかながら光が見えてきたようだ。9月にサウジアラビアを訪問した村山首相との会談で、サウジの国王は、イスラエルがいずれは全てのアラブ諸国に承認されるであろうとの見解を披瀝した。また北アイルランドと英国との間の停戦状態も、既に一年を越えている。その間テロ事件はなく、ロンドンも平穏を取り戻した。

このように希望の光が見えてきた地域がある反面、再び闇の時代に逆戻りしている地域もある。旧ユーゴスラビアの諸地域はその一つである。セルビア、ボスニア、ヘルツェゴビナなどという名前を聞くと、世界史を少しでもかじったことのある人であれば、80年ほど昔のある事件を思い出してしまうだろう。この地域もまた、イスラエル・パレスチナやイギリス・アイルランドと並び最も紛争の多い地域だった。

バルカン半島のサラエボで、セルビア人青年の銃口から第一次大戦が始まった。そしてヨーロッパは、その後4年以上も未曾有の大戦に見舞われることになった。しかも戦争の余波はヨーロッパのみに止まらず、アジアやアフリカや北アメリカにも及んだ。人類がそれまで経験したことのなかった大きな戦では、およそ900万人もの戦死者がでたと言われる。その後世界がもう一度経験しなければならなかったもう一つの大戦に比べれば、遥かに少なかったとはいえ、この数字は、人々がそれまで戦争について持っていた考えを変えてしまうほどの想像を絶する数字だった。

この無数の死者の中には、本稿の主人公たるアラン・フルニエやその晩年（という言葉を用いるのがはばかれるほど早い死であったが）の数年間の文学上、宗教上の先輩にして同志だったシャルル・ペギーが含まれていた。彼らは開

戦直後といってもいい 1914 年の 9 月に、相次いで戦死した。幸い戦死は免れたものの、フルニエのリセ・ラカナル以来の戦友で最愛の妹イザベルの結婚相手でもあったジャック・リビエールは、開戦早々の 1914 年 8 月に捕虜となり、終戦まで自由を回復することができなかった。さらには、最後の何年かのフルニエの雇用者であり当時大変な人気のあった女優シモーヌの夫だったカジミール・ペリエも、ベギーやフルニエのおよそ 1 年後に戦死した。

こうして見ただけでも、この戦争の被害の大きさの一端はうかがうことができるであろう。ちなみに主要国の死者は、ドイツが 190 万人、ロシアが 170 万人、フランスが 140 万人、オーストリー・ハンガリー帝国 100 万人、イギリス 93 万 5000 人、セルビア 40 万人、ルーマニア 15 万人、アメリカ 11 万 5000 人であった。

§2 戦争への道のり

第一次大戦が始まったとき、多くの人々はこの戦争がこれほどまでに大きな被害を及ぼすことになるとは全く予想していなかったし、これほど長期化するとも予想していなかったと言われている。「クリスマスまでには終わっているだろう」というのがおおよその予想だった。いくつか不安材料はあったものの、世界はこの戦争が始まるまで平和を謳歌していた。だいたい不安の種がなにもないような時代が未だかつてあったであろうか。だからこそこの大戦前の時代は後に「ベル・エポック」と呼ばれ、人々はその古きよき時代を懐かしむことになったのである。

1890 年にドイツ統一の最大の功労者であり、20 年もの間帝国宰相を務めてきたビスマルクが解任された。ビスマルクの長年のパートナーだったウィルヘルム一世はその 2 年前に既に世を去り、フリードリッヒ 3 世の短い(わずか 100 日あまり)統治期間を経て、ウィルヘルム 2 世の時代になっていた。ウィルヘルム 2 世は最初こそビスマルク路線を忠実に継続する旨を公

言していたものの、両者は社会主義者鎮圧法をめぐる鋭く対立し、結局ビスマルクの解任につながった。

シャルル・ペギーがオルレアンに生まれたのは、普仏戦争によるフランスの敗北を機にドイツ帝国が成立して間もない 1873 年のことだった。彼はビスマルクが築き上げた体制の完全な崩壊現象としての第一次大戦で戦死したのであるから、その生涯はビスマルク体制とともにあったと言っても過言ではないであろう。13 歳も後輩のフルニエの場合にも同じことが言える。彼もまだビスマルクが健在な時期に生まれて、ペギー同様第一次大戦の初期に戦死したからである。

ところでペギーの生まれた 1873 年には、フランスでは大統領がティエールからマクマホンに代わった。そして大統領の任期が、それまでの 5 年から現在の大統領の任期と同じ 7 年へと延長された。文学の世界ではランボーの『地獄の季節』が発表されている。

ビスマルクの退場によりドイツの外交方針には大きな変化が生じた。ビスマルク外交は、フランスとロシアの結びつきを断ち切り、イギリスを敵にまわさないのがその基本方針だった。フランスとロシアが手を結ぶことは、ドイツ帝国が西と東から挟み撃ちされることを意味した。いかに新生のドイツ帝国が強大だったとはいえ、西と東で同時にフランスとロシアという強国を相手に戦争を遂行することは不可能だったからである。

彼の外交政策の根本は、三つの三国同盟から成り立っていた。一つはドイツ、オーストリア、ロシアの三国同盟である。これによりオーストリアとロシアの平和を維持し、同時に露仏両国の結びつきを防ぐことが可能になった。二つ目はドイツ、オーストリア、イタリアの三国同盟である。この三国同盟は、第一次大戦まで 30 年以上の長きにわたって保持されたけれども、大戦前夜にはイタリアが密かにフランスに接近し、この同盟の有効性は脆弱なものとなっていた。第三はドイツ、イタリア、ルーマニアの三国同盟である。これにより、ルーマニアがロシアあるいはブルガリアから攻撃を受けた場合には、オーストリアがこれを救援することが約束された。この東欧の間

題に関しては、同盟関係にあるドイツとロシアの間が緊張したこともあったが、ビスマルクの在任中は事なきを得たのだった。

この三つの三国同盟に加えて、後にドイツ、オーストリア、イギリス間の三国協定が結ばれた。これはロシアがバルカンの現状を脅かした場合には、三国が協力してロシアにあたることを約束し、ロシアを牽制するための協定だった。ロシアと同盟を結んでフランスとの提携を阻止すること、しかし同時にイギリスとも結んでロシアの動きを牽制すること。この卓抜な戦略とビスマルクの資質が、緊張をはらみながらも長い間の平和を維持することを可能ならしめた最大の原因だったと言っても過言ではないであろう。

アラン・フルニエが生まれたのは、ビスマルクの任期がその終盤にさしかかった 1886 年のことだった。またこの年は、ブーランジェ将軍が陸軍大臣に就任した年でもある。反ドイツ感情を鼓吹したこの人物が国民的人気を勝ち得たこと自体が、フランス人の根強いドイツ嫌いを証拠立てている。

ベギーとフルニエには 13 歳もの年齢の開きがあるものの、二人とも普仏戦争の敗北とドイツ帝国の成立以来の激しい反ドイツ感情にひたされてその青少年時代過ごしたという点では、大きな相違はなかったと言っている。アメリカとソ連、日本と旧ロシアというように、潜在的な敵国というものがこれまでの歴史では存在してきた。そしてフランスとドイツこそは、まさにそうした潜在的な敵国の組合せの中の代表例と言っても過言ではなかった。いや、潜在的というのでは表現がなまぬるいかもしれない。顕在的な敵国、あるいは公然の敵国と言ったほうが適切であるかも知れない。

フルニエがエピヌーユ・ル・フルリエルで幸福な小学生時代を過ごしたのは、ビスマルク辞任の翌 1891 年から 1898 年のことだった。フランスは帝国主義への傾斜を強めながらも、国際的な孤立に悩みながら、ロシアとの提携の道を探っていたのが彼の小学生時代の前半にあたる。そして露仏同盟の結ばれた同じ年には、ドレフェス事件が起こり、フランス国内を二分する大きな騒ぎに発展した。1894 年に始まり 1899 年に一応の決着を見るこの事件も、先に見たブーランジェ将軍の事件同様、フランス人の激しい反ドイツ感

情がその根底にあったことは否定できない。

まだ小学生だったフルニエは、直接この事件の推移を固唾をのんで見守るという年齢ではなかったけれども、事件勃発の年には既に成年に達していたシャルル・ペギーの場合は、それとは事情を異にしていた。この年にエコール・ノルマル入学を果たした彼は、当然この事件に大きな関心を示したのである。正義感の強かったペギーが熱心なドレフェス支持者であったことはよく知られている。そういった次第で 1894 年という年は、ペギーにとっては文字どおりエポック・メイキングな年だったのである。

この事件でドレフェス大尉を弁護した人物として、今日では『居酒屋』の著者エミール・ゾラの『私は弾劾する』だけが有名であるが、ドレフェスを弁護したのは決してゾラ一人ではなかった。政治にはおよそ関心がないと思われていたアナトール・フランスも、ドレフェス支持の論陣を張った。だがこれは同時に右翼陣営の危機感を呼び覚まし、モーリス・パレスらの運動も大きな影響力を持つようになった。

フランスとドイツの反目は、第一次大戦がフランスの勝利に終わった後も収まらず、第二次大戦後も生き続けて百年以上もの命脈を保った厄介な代物であったが、EU 成立により、ようやくその終焉を迎えた。

フランスでは普仏戦争の敗北後、失地回復のため海外進出の動きが出ていたが、その本格的な拡大は 90 年代に入ってからである。ただ海外進出をねらっていたのはフランスばかりではなく、他の列強諸国も同様であったから、当然利害の調整が必要になった。90 年代以降のめまぐるしい同盟関係の締結は、こうした利害調整の努力の結果だった。ちなみにフランスでは、ドレフェス事件が起こったり、ペギーがエコール・ノルマルに入学したのと同じ 1894 年に植民省が新設された。

フランスの反ドイツ感情がどれほど激しいものであっても、フランス一国ではドイツに勝ち目はなかった。自信を持って国際関係を処理するためには、どうしても同盟国の存在が必要だった。だがビスマルクが宰相の地位についているあいだ、フランスは彼の巧妙な外交政策に翻弄され、有効な手を

打つことができなかつた。

しかしビスマルクが退陣すると間もなく、ドイツの外交政策の根幹に大きな変更が加えられた。ビスマルクの後任者のカヴリヴィによるドイツ、オーストリア、ロシアの三国同盟の破棄である。ビスマルクが退任してから僅か三ヶ月後の1890年6月のことだった。これにより、一切の同盟関係から除外されたロシアが大きな不安を抱いたことは想像に難くない。ロシアがもう一つの国際的な孤児であったフランスと結びついたのは、当然すぎるほど当然だった。紆余曲折はあったものの、両国はフランス海軍のクロンシュタット訪問とそれに対するロシア艦隊のツーロン訪問を契機にして、1893年12月に露仏同盟を締結した。かくしてビスマルクが最も恐れていた事態が、彼の退任後僅か3年という短時日で出来あがってしまったのである。

しかしながら露仏同盟が成立したからといって、直ちにヨーロッパの雲行きが怪しくなったわけではなかつた。ヨーロッパは、これからなお20年以上も戦争に見舞われることはないであろう。大戦が始まった時でさえ、多くの人々が戦争はそれほど大事にはならないだろうと思つたのは、それだけ人々が平和を当然の事実として受け入れていたからである。また同時に、戦争というものは、それまではそういうものだった。戦争とは一部の人々によるゲームのようなもので、その被害もきめて限定的なものにすぎないというのが、むしろ一般的な認識であつた。

カントの『永久平和論』のような先駆的な業績はあつたとはいえ、人々が心底から戦争の恐ろしさを身をもって経験したのは、第一次大戦が初めてのことだった。この経験は人々の戦争観を根底から覆すものだった、と思われる。それだけに、人々は大戦前の平和な時代をなおさら懐かしみ、後に『バル・エポック』という美しい名前でのこの大戦前の平和な時代を呼ぶようになったのである。

露仏同盟が直ちに平和の破局につながらなかつたのは、イギリスがベルギーのエジプトやスーダンへの進出を承認したことがドイツの利害と衝突し、ドイツとイギリスの緊張関係の結果、ドイツが露仏同盟の側にすりよっ

たからである。日清戦争の処理をめぐってドイツ、ロシア、フランスの三国が日本政府に圧力をかけたため、日本が妥協を余儀なくされた「三国干渉」は、こうした文脈の中に置いて見れば容易に理解されよう。ドイツ、オーストリア、ロシアの三国同盟の崩壊後しばらくは、最大の植民地を有するイギリスに他の大国が連携して対抗したのである。特にドイツとイギリスの対立は激しさを増していった。またイギリス、フランスはアフリカでの植民地獲得をめぐって対立していた。アフリカ大陸を縦断してイギリス植民地を獲得しようとするイギリスの意図と、その横断を目指すフランスの意図が衝突したのが、有名なファショダ事件である。

1900年には中国で義和団事件が起こった。ロシアはそれを利用して南満州のほぼ全域を占領した。これが、ロシアの北からの脅威に怯えていた日本と、ロシアの権益が大きくなることを望まないイギリスとの利害の一致の結果としてもたらし、両国は1902年に日英同盟を締結した。その結果、イギリスの後押しにより、日本はかろうじて日露戦争に勝利をおさめることができたのだった。

19世紀最後の年(1900年)にペギーはカイエ・ド・ラ・カンゼーヌ(『半月手帳』)を創刊した。この雑誌は、1914年に彼が従軍する直前まで生涯にわたって続けられた。

同じ時期、ということは世紀末から世紀始めの数年間、フルニエはパリ、ブレスト、ブルジュのリセを転々とした。船乗りになるべく、ブレストのリセに転校したことはやや唐突な印象を与えるが、この帝国主義時代のフランスの海外進出熱ともなにか関係があったのであろうか。それとも父親譲りの夢想癖が頭もたげたのであろうか。いずれにしても、船員養成のための学校の雰囲気になじめなかった彼は、やがてブルジュのリセに転校した。彼の通ったこの学校は今日、リセ・アラン・フルニエと命名されている。

日露戦争の時期にフルニエは、リセ・ラカナルで高等師範学校の入試に備えていた。後に親友となるジャック・リビエールと出会ったのも、この学校だった。日露戦争の始まった1904年には英仏協商が結ばれ、フランスは

ロシアだけではなくイギリスとも同盟国になり、国際舞台での立場を強めていった。

フルニエが夏休みの間、イギリスで壁紙製造を業とする会社で働いたのは、協商成立の翌年のことだった。（『ロンドンのアラン・フルニエ』参照，中央学院大学教養論叢第4巻第2号，1992年2月発行）英仏の友好的な雰囲気の中でフルニエのイギリス滞在は、大変快適なものだったことは言うまでもない。家族やリエール宛の書簡には多くの証言がある。この年はまた、後年彼の創作の源泉となった女性に初めて会った年でもあった。だがこの年はまた、モロッコを巡って独仏関係が緊張した年でもあった。1904年の英仏協商ではモロッコにおけるフランスの優先権が認められたのだが、これに対しドイツもまた自らの権利を主張したからである。ドイツの強気の背後には、当時フランスの有力な同盟国ロシアの日露戦争における敗北が確実視されるようになったという事情があった。もちろんフランスには、イギリスという新しい強力な同盟国もあったため、それに加えてアメリカもフランスに好意的であったため、フランスの優越的地位は保全されたのだが、これにより、孤立したイギリスをフランス、ロシア、ドイツが包囲するという構図が崩壊した。その結果、フランスとドイツの間の対立関係は元に戻ってしまった。

このように日露戦争から戦後にかけて、世界の構図は大きく変化した。即ちイギリス対他の大国という対立の構図（日清戦争前後）が、ドイツ、オーストリア対イギリス、フランス、ロシア、日本という組み合わせに変わったのである。その変化をもたらした大きな原因は、1904年のイギリスとフランスの接近だった。フランスとの結びつきの強かったロシアと、イギリスとの結びつきがあった日本が、日露戦争の終了後僅か3年にして日露協商（1907年）を結ぶことになったのは、イギリスとフランスの新たな結びつきの当然の帰結なのであった。この1907年には日仏協商、英露協商も結ばれた。こうしてビスマルクの退場後約二十年近くかけて、世界は第一次大戦で相争うことになる国家間の対立の構図が出来上がっていったのである。

自分たちの近い未来を左右することになる、このような大きな時代の変化

が起きている時期に、フルニエやリビエールは受験生としての生活を過ごしていた。しかしながら、二人とも人並み優れた知性の持ち主であったにもかかわらず、受験勉強だの入学試験だのにはあまり適した資質ではなかったようである。フルニエは、結局高等師範学校入学を果たすことができなかった。リビエールは、高等師範を諦めてボルドー大学に進学した。フルニエは、1907年にエコル・ノルマルの入試に再度失敗したのを機に、進学それ自体を放棄した。しかも同時に、彼はイヴォンヌ・ド・キエヴルクールが結婚したという事実をも知らされたのだった。入試の失敗とただ一度しか会ったことがなかったとはいえ、彼のイメージをふくらませてきた女性の結婚という二つの打撃に見舞われたこの1907年は、後に触れる1909年と並び、彼の生涯における危機的な年だった。

エコル・ノルマル入試とイヴォンヌに心を奪われている間に、彼は既に成人に達していた。当時の成人男子の宿命として、彼は兵役に服さなければならなかった。それは1907年から1909年にかけてである。当時は2年間の義務年限だった(1905年制定)。

フルニエとリビエールの交際のきっかけは、双方がラカナールに在籍したことにあっただけだが、フルニエとペギーが相手の存在を意識したのがいつごろのことだったのかは特定できない。名前を知ったのはいつのことか、作品を読んだのは、初対面はという点はすべてが明らかにされているわけではない。リビエール宛書簡にペギーの名前が初めて登場するのは、1910年8月のことである。ここではペギーが前年カイエに発表した『友人、定期講読者各位に』⁽¹⁾についての感想が述べられている。これがペギーへの初めての言及であることは確実であるが、だからといってこの記事がフルニエが最初に読んだペギーの作品であることを必ずしも意味するものではない。ペギーが『カイエ』を刊行したのは、フルニエがペギーに初めて言及する10年も前のことだからである(1900年)。そしてこの雑誌は、創刊以来知識人の間に熱心な多数の読者を獲得した有名な雑誌だったのであるから、1910年に至るまでフルニエがペギーの名前も『カイエ』の存在も知らなかったとはとう

てい思えない。

1990年に刊行されたシャルル・ペギー、アラン・フルニエ往復書簡集の編者イヴ・レイ＝ヘルムは、この二人の接触は NRF を媒介にしているのではないかと考えているようである。その根拠として、同氏は NRF 同人には熱心な『カイエ』の定期購読者がいたことを挙げている。例えばジッド、シュランベルジェ、ドルーアンといった人々である⁽²⁾。また 1909 年には NRF 誌に『シャルル・ペギーのカイエ』という記事が出たこと、そしてこの号にはリビエールの『夢の形而上学への序章』が掲載されていたこと、従ってフルニエがそれを読まなかったはずがないことをもつけ加えている⁽³⁾。NRF の編集者としてのリビエールの口からペギーの名が全く出ないというのも、何となく考えにくいことである。

さらには 1910 年 1 月にペギーが発表した『ジャンヌ・ダルクの愛徳の神秘』にジッドが深い感銘を受け、10 部も購入してクロードル、フランシス・ジャム、アンリ・ゲオン、ヴェルハーランらに配ったことを、氏は指摘している。そればかりではなく、ジッドはその全文を妻のマドレーヌに読んで聞かせたそうである⁽⁴⁾。いずれにせよ、今日残されているフルニエからペギー宛の最初の書簡の日付は 1910 年 9 月 28 日である。これから 1914 年 3 月の最後の手紙まで四年足らずの間に、二人の間には 78 通もの書簡が往復することになった。双方ともパリに居住し、かなりの頻度で訪問しあっていたうえでこれだけの数の書簡が残されたのは、二人の交際がかなり密接なものだったことを十分に証拠立てていると言ってもいいのではなかろうか。

二人の間には 13 歳という年齢差があったことを考慮すると、こうした濃密な友情が成立したのは、双方によほど引き合うものがあったというほかない。オルレアン出身のペギーに対し、ソーニュ出身のフルニエには出身地の近さという親近感があったとしても不思議ではない。また二人ともラカナル、ルイ・ルグランというリセの出身者だった。ペギーはフルニエが失敗したエコル・ノルマルの出身者だった。しかしながら、こんなことをいくら並べ立てても、二人の間に成立した友情の謎を解くには不十分であろう。

実際の交際が始まる 1910 年の前年は、ペギーにとってもフルニエにとっても危機的な年だった。ペギーにとっては『カイエ』の経営問題が悩みの種だったし、ブランシュ・ラファエルの結婚問題もまた、彼を苦しめた。フルニエにとっても、この年は自らの孤独をそれまでに強く意識させられた年だった。一つは最愛の妹とリビエールの結婚がきっかけになった。彼は親友と妹が結婚したことを喜ぶよりも、自分一人が孤独のうちに取り残されたという意識を強く抱いたようである。彼の書簡には、そうした孤独を訴える語句が多く見いだされるようになる。もう一つはイヴォンヌが母親になったという事実を知らされたことである。彼は、彼女が自分から永遠に失われたことを認めざるを得なかった。

双方の側のこうした事情は、人と人を結びつける必要条件を満たしているかもしれない。だが、それだけでは十分なものではないであろう。二人の場合には、それに加えて双方の作品を評価できるという点が、必須の条件だった。

フルニエからペギー宛の最初の書簡はかなりの長文である。この中で彼は、ペギーのことを「ラブレールが言葉に酔っていたように思想と知性に酔っている」と述べ、「あなたは物事を夢中になって説明する教師であるだけでなく、同時にそれらを提示したり、目で見えるようにするために詩人、幻視家になる」⁽⁵⁾ところが最も自分の気に入っている点であるとしてつけ加えている。そして彼は自分の父親が語った普仏戦争の経験談により、普仏戦争がそれまでは単なる歴史であったのが、それを目撃し、恐怖を実感できたことを例に挙げ、ペギーの著作物もそのようなものであると語っている。

ペギーの側も、彼の資質を高く評価していたことは疑いない。フルニエから贈られた『肖像』を読んだペギーが、「フルニエ君、君はきっとものになる。いつか君はそう言ったのが僕だったことを思い出すだろう」⁽⁶⁾という手紙を書き送ったことは、よく知られている。

ドレフェス事件後のフランスでは、とりわけ 20 世紀が始まる前後からは、モロッコがその植民政策の中心を占めるようになった。1904 年に締結

された英仏協商も、フランスがエジプトにおける優先権を認める代わりに、イギリスにフランスのモロッコにおける優先権を認めさせることがその骨子だった。翌 1905 年に、ドイツがモロッコに軍隊を派遣して、モロッコにおけるドイツの権益を主張したため、国際関係は大いに緊張した。アルヘシラスの国際会議でイギリス、アメリカがフランスを支持したため、フランスの権益は守られたが、独仏関係はいっそう悪化した。こうした事態の進展の中で、急進派は再度右翼的傾向を強め、CGT に結集した社会主義者達と鋭く対立するようになっていった。

1911 年にモロッコに反仏民族運動が起ると、ドイツが再度干渉し、フランスに迫って仏領コンゴの割譲を要求した。こうしたドイツの動きに反応して、フランス国内では一層ショービニズムの傾向に拍車がかかった。

このような事態の中で、ポアンカレは先ず首相として、次いで 1913 年には大統領に就任した。同年、1905 年以来 2 年制だった兵役が 3 年に延長された。これに対してはシャルル・ペギーは 1914 年 2 月のフルニエ宛の手紙で支持を表明している。大戦勃発時に既に 40 歳を過ぎ、中年に達していながら、志願して一兵士として戦地に赴いて、マルヌの戦いで壮烈な戦死を遂げたペギーの発言であってみれば、決して意外な発言ではない。しかし熱烈な愛国者であっても、決していわゆる右翼とはいえないペギーのような人物までこうした兵力の増強に賛成するほど、国論が一つの方向に収斂しつつあったことは否めない。当然こうした政府の動きに対して反対する動きもあったのだが、政府による度重なる弾圧により弱体化し、政府との妥協をはかる動きも現れるなど、徐々に挙国一致態勢といってもいい雰囲気になった。

後から見れば、徐々に戦争への道をまっしぐらに突き進んでいた、この大戦前の自らにとって、僅かに残された日々を費やして、フルニエは唯一まとまった作品となる『グラン・モーヌ』を仕上げる事ができた。NRF に連載され、当然単行本も同じガリマールから出版されるものと思われていたのが、シモーヌの希望をいれてエミール・ポール社からになったいきさつや、

同じくこの作品に文学賞を受賞させるためのごたごとと、それを巡る人間関係には、ここではいっさい触れないことにする。1913年5月から、フルニエとシモーヌは愛人関係にあったようである。リビエール夫妻の長男のアラン・リビエール氏は、ロシュフォールでのイヴオンヌとの再会で蘇った彼女への思いと、シモーヌへの思い、そして小説の出版が、1913年のフルニエの三つの重大事件だったと語っている⁽⁸⁾。

晩年のフルニエの仕事は、カジミール・ペリエの秘書という役割だったのだが、この仕事自体もペギーの紹介によるものだった。それが原因なのかどうか、フルニエとシモーヌとの恋愛についても、ペギーは介入や忠告をすることはなかった。いずれにしても、最後の何年間かのフルニエの生活の中では、ペギー及びそこから派生した人間関係が非常に大きな比重を占めていたことは否定できない。フルニエとシモーヌの恋愛をめぐっては、フルニエの死後、イザベルとシモーヌの間で論争が持ち上がったけれども、本稿ではこの問題には触れないことにする。いずれにせよ、フルニエの新たな雇用者であるカジミール・ペリエの夫人、シモーヌはフルニエの最後の恋人となった女性であることは確かである。

§3 最後の年

こうした情勢の中で1914年を迎えた。フルニエもペギーもカジミール・ペリエも、7月末に戦争になり、自分たちが動員され、9月には戦死することになる（ペリエの戦死は翌15年）ことは予期することはできなかったに違いない。2月には若い文学者達のフットボールやラグビーのチームが結成され、シャルル・ペギーがその名誉会長であることが新聞で紹介された。そしてペギーの写真が出ていることを、フルニエはわざわざ葉書で知らせている⁽⁹⁾。まだまだ世の中は平和だったのである。

二人の最後の書簡はフルニエからペギー宛であるが、これはシモーヌが疲れているので、今夜の約束は反古にして欲しいという連絡である。このよう

な形で二人の文学者の、少なくとも書簡を通じての交際が永久に閉ざされるのは唐突な感じがするけれども、双方ともにこの時点ではこれが最後の書簡という意識は全くなかったのである。ただそれから彼らの死までの数カ月の間、二人の間に書簡が残されていないのは、フルニエの都合によるところが大きいものと思われる。

最後の春になった 1914 年の春を、フルニエはエロー県から選挙に立候補したカジミールに同伴して、選挙運動に明け暮れていた。この間、彼はパリとペリエの選挙地の間を往復していた。彼の献身的な応援にもかかわらず、4 月 26 日にペリエの落選が決定した。1914 年の前半は、選挙運動の他に『グラン・モーヌ』に次ぐ長編小説や、シモーヌのための戯曲の執筆にも多くの時間が割かれている。彼は相当に多忙な日々を過ごしていたものと思われる。家族宛、リビエール宛の書簡も、この最後の年は極めて少ないのであり、ベギーに対してだけ筆無精だったということでは必ずしもなかったのである。

多忙な生活の中で書きつがれたこれらの作品は、結局完成することなく、その断片だけが『コロンプ・ブランシェ』及び『森の家』として残された。5 月にはシモーヌとともに、ペリエ家の別荘のあるピレネーに程近いトリに赴いた。6 月 26 日付のイザベル宛の葉書からは、シモーヌとの生活が語られた上で、芝居のほうは一時中断して小説に専念する予定であることが報告されている。⁽¹⁾ ボスニアの首都サラエボでセルビア人青年の銃弾がオーストリア皇太子夫妻の命を奪ったのは、それから僅か二日後のことだった。

7 月中旬には、フルニエとシモーヌは風雲が急を告げ始めたパリを出て途中ボルドーに立ち寄り、7 月 17 日にオテル・ド・フランスでリビエール夫妻と会食した。そして、これがフルニエと夫妻との最後の会見になった。フルニエとシモーヌはそれからカンボに向かった。

大戦が始まるまでには、まだおよそ一月の時間が残されていた。オーストリアがドイツの支持を取り付けてセルビアに最後通告を突きつけたのが、7 月 23 日のことである。そして 28 日には宣戦布告がなされた。それに対し

て、セルビアの保護者をもって任じていたロシアが、30日に総動員令をだした。ロシア軍が実際に動き出す前に手を打たなければ、背後をフランスというもう一つの強国に脅かされることになるであろう。それを避けるためには、ロシアを脅迫して総動員をやめさせなければならない。そこで31日に、ドイツはロシアに動員解除を迫るが、ロシアはこれを拒絶した。

7月31日には、この緊迫した空気の中でフランスでは社会党の大立者ジャン・ジョレスが暗殺された。同じ日に、フルニエはカンボからエミール・ポールに手紙を書いて、原稿料を小切手でなく現金でここに送金するよう依頼した後で、仕事はしているが、いつ動員されるかわからない状態の中では仕事に集中できないこと、しかしもし10月に東部（もちろんドイツ国境方面のことである）にいるようなことにならなければ、『コロンブ・ブランシュ』が完成するであろうと述べた。⁽¹²⁾

ロシアの拒絶をうけて、ドイツは8月1日ロシアに対して宣戦を布告した。同じく1日にフランスでは動員令が発動され、フルニエもリビエールもそれぞれ所属部隊の所在地に向かった。リビエールはマルマンドに、そしてフルニエはシモヌの車でカンボに向かった。8月1日にはイザベルがフルニエに、そしてフルニエがイザベルに、それぞれ相手の消息を気遣う便りを出している。フルニエのはバイヨンヌから投函された葉書で、翌2日にミランドで所属部隊に合流する予定であることが述べられ、さらに「僕たちは必ず戦争になると思っていた。僕は喜んで戦争に行くよ。じきに君に会えると思う。」と続いている。⁽¹³⁾3日にはドイツがフランスに宣戦布告し、いよいよ戦争が始まった。

喜んで、というフルニエの言葉には今日の私達はやや戸惑いを覚えるけれども、戦争に対する強い忌避の感情というものは、むしろ第一次大戦の被害のあまりの大きさに人々が驚愕した結果、生じたものではないだろうか。当時はまだ牧歌的な戦争観が支配する時代だったように思われる。また、当時のフランス全体に漲っていた、強い愛国的な感情の存在にも注意を払わなければならない。これは右翼、左翼を問わない普遍的な感情だった。今日でも

フランス各地を旅行したことがある人は、町の広場や駅の構内に第一次大戦の戦没者の慰霊碑を見た経験のある人も多いだろう。大戦の被害の大きさが人々の想像を絶するものだっただけに、人々はこうした慰霊碑を建てて戦死者の霊を弔い、不戦を誓ったのである。「じきに君に会えると思う」という言葉にも、当時の人々の戦争観が見いだされる。「クリスマスまでには戦争は終わっているだろう」というのが多くの人々の予想であったとすると、人間の予知能力の貧弱さには暗い気持ちにならざるを得ない。「ヨーロッパの軍部はすべて、攻撃こそが近代戦の唯一の有効な手段であり、それは防禦のためにも必須だと、信じていた。かれらはこの点でまったく間違っていた。かれらは、1904—5年の日露戦争と、1912—13年のバルカン戦争から（いや、半世紀前のアメリカ南北戦争からさえも）、防禦はますます強力となり、攻撃はますます困難になった、ということ¹⁴を学べたはずであった。しかし誰もそれを学ばなかった。」と、『第一次世界大戦』の著者 A. J. P. テイラー氏は述べている。戦争の専門家ですら、戦争の性格が変わったことに気づいていなかったとすれば、素人は言わずもがなであろう。戦争の長期化、持久戦化は必至であった。その上この度の戦争からは飛行機、戦車、毒ガスという新兵器も次々に登場し、ついには 900 万人もの戦死者を数えるに至ったのである。

8 月 4 日には、ミランドからかなり長文の手紙をイザベル宛に出した。ミランドは、フランス南西部のスペイン国境に近いジュール県の都市で 1907 年の兵役以来、お馴染みの場所である。この書簡では、自分が 288 歩兵連隊の 23 中隊に所属することが報告されている。この時フルニエの位階は中尉だった。シモーヌが非常に献身的であったこと、自分が戦争に行っている間シモーヌと仲良くしてもらいたいこと、そして戦争から帰ったらシモーヌと結婚する予定であること、出陣前にもう一度イザベルに会いたかったこと、周囲は兵士達のおしゃべりとタバコの煙に満ちていること、などを綴り、じきに再会できるであろうと締めくくっている。じきに再会できるだろう、という言葉は、当時の人々の共通認識であったことは以前にも触れた通

りである。この手紙にも触れられているように、4日にはドイツがベルギーに進攻し、それに抗議してイギリスもドイツに宣戦を布告、戦争はますます地域的なものから遠ざかり、ヨーロッパ全域へと拡大していった。

8月8日には、フルニエの両親がミランドまで面会に訪れた。9日には、フルニエの所属する288歩兵連隊は徒歩でオッシュ（オック）に向かった。12日夜9時に、連隊は汽車に乗り、東部の戦線を目指した。同じ12日にはイザベル宛に葉書を書いた。それには、11日にオッシュ（オック）で両親と別れたこと、イザベルからの手紙を2通受け取ったこと、自分達の部隊はこれからトロワを目指すのではないかという予測が語られ、シモーヌにも手紙を書くように依頼している⁽¹⁶⁾。

14日には、やはりイザベル宛に48時間近くも北東の方角に向かっていること、現在はブルジュの近くにいることを告げる短い葉書を出した⁽¹⁷⁾。その間、11日にオーストリアがロシアに、12日にはイギリスがオーストリアに、13日にはフランスがオーストリアに、それぞれ宣戦布告を行なった。フルニエがイザベルにこの葉書を出した14日には、アルデンヌ及びロレーヌで、フランス軍とドイツ軍は戦闘状態に入った。

8月20日頃、彼はマルグリット・オードーに手紙を送り、前年ロシュフォルでイヴォンヌに会ったおり彼女に送った手紙を破棄するよう依頼した⁽¹⁸⁾。これもまた、次のものと同じく、シモーヌの感情に対する配慮からである。

次に我々に残されているのは、8月28日付の葉書である。この葉書の書かれた4日前の24日に、リビエールはドイツ軍の捕虜になり、ドイツ国内に連行されたが、この時点ではイザベルもフルニエもまだそれを知らなかった。この葉書の内容は、以後手紙はミランドの所属部隊の駐屯地に出すこと、封書の使用は認められていないことなどを知らせた後、砲声が遠くから聞こえるようになったこと、つまり戦場が近くなったことを告げて、自分の身に何かあった場合には、金庫や書簡を整理して、シモーヌに関係のないものは全て破棄し、残りはシモーヌに渡すよう依頼した⁽¹⁹⁾。葉書を書いた次の日

29日には、有名なタンネンベルクの戦いでドイツ軍がロシア軍を撃破した。

9月に入り1日早々、フルニエの属する歩兵288連隊は戦闘に突入した。9月3日には、シモーヌ宛の手紙でリビエールが行方不明になった事実を報告している。この頃シモーヌは、フルニエが前線に出なくてもすむよう働きかけを行っていたようであるが、不調に終わった。9月7日には、数年来親密な交際を重ねてきたシャルル・ベギーが戦死した。自身の戦死に2週間先立つ先輩作家の死を、フルニエは知る機会があったであろうか。

9月4日付のイザベルのフルニエ中尉宛の手紙では、フルニエがどこにいるかを問いかけ、さらに夫のジャック・リビエールも義弟のマルクも消息がわからないことを報告している。捕虜になってから10日以上が経過していたが、彼女にはまだその事実が知らされていなかったのである。10日にもイザベルは兄に宛てて、滞在中のスノンから手紙を出した。マルクの消息はわかったけれども、リビエールの消息は依然として不明であった。

9月11日には、フルニエの家族に宛てた最後の葉書が書かれた。この葉書がイザベルに届いたのは、21日である。前線からちょうど10日かかったことになる。その内容は、イザベルからの手紙(複数)を受け取ったこと、自分はいたって元気であること、間もなくリビエールの近くにまで行かれるのではないかという期待を表明しているのは、イザベルに対する心遣いからであるが、この時点ではフルニエは、リビエールが行方不明であることは承知していたものの、ドイツ軍の捕虜になった事実は知らなかったので、最悪の事態を覚悟して、自分も間もなくリビエールのもとに赴くことをそれとなく示唆したのであろうか。3日のシモーヌ宛の手紙では、リビエールが行方不明になったときの状況から戦死した可能性は少なく、リビエールは負傷してどこかの病院に収容されたか、所属する部隊からはぐれて別の部隊に合流したか、あるいはドイツ軍の捕虜になったかのいずれかであろうとしているけれども、この時点では、まだ確かなことは誰も知らなかったのである。戦争はフランスの勝利に終わるだろうという希望を表明し、自分の無事を神に祈ってくれるよう依頼した後、イザベルと姪のジャクリーヌに対する愛情を

込めた別れの言葉で葉書を終えている。²³

9月19日にはシモーヌに宛てて葉書を書いた。「僕達を待つ幸福、僕達のもつ子供達²⁴」という言葉が見いだされる。

フルニエ中尉がサン・レミの森で戦死したのは、9月22日である。1914年の夏は天候に恵まれたが、秋になって不順な日々が多くなった。18, 19, 20はいずれも雨天だった。22日も朝のうちはぬかるみがひどく、霧がかかっていたがやがて晴れた。戦闘の様様については、アラン・フルニエの詳細な伝記的研究を行なったジャン・ロワーズの研究書に詳述されている。彼は、フルニエと同じ部隊でフルニエの最後を見届けた兵士を探し出して、詳しい話を聞きだすことができた。²⁵

フルニエ中尉とその部下達が戦死した場所は、フランス軍が退却を余儀なくされ放棄された。その後4年間、この土地は戦場となったため、ドイツ軍がフルニエ達を埋葬した場所も砲弾で吹き飛ばされて確認できないかもしれない、とこの証言者は語っている。ジャン・ロワーズの研究書が公にされたのは1968年のことである。その後も長い間、アラン・フルニエの亡骸の所在は不明のままだった。

彼の遺体が20名の同僚兵士とともに埋葬された場所で確認されたのは、その戦死から77年後のことで、もう一つの大戦の終了からでも既に50年に近い歳月が過ぎ去っていた。彼の遺骸は、同僚達とともに1992年11月10日、サン・レミ・ラ・カロンヌの戦没兵士共同墓地内に埋葬された。²⁶ もはや彼を直接知る人々は、一番最後まで残ったシモーヌを含めてすべて故人になっていた。

〔注〕

- (1) Jacques Rivière, Alain-Fournier Correspondance, p. 382-p. 383.
- (2) Charles Péguy, Alain-Fournier Correspondance p. 25.
- (3) Ibid., p. 26.
- (4) Ibid., p. 28.
- (5) Ibid., p. 52.

- (6) Ibid., p. 76.
- (7) Ibid., p. 215.
- (8) Alain Rivière Alain-Fournier Les chemins d'une vie p. 112.
- (9) Charles Péguy, Alain-Fournier Correspondance p. 217.
- (10) Ibid., p. 219.
- (11) Alain-Fournier Lettres à sa famille et à quelques autres p. 528.
- (12) Ibid., p. 657.
- (13) Ibid., p. 533.
- (14) A. J. P. テイラー著, 倉田稔訳, 第一次世界大戦, p. 17, 新評論, 1980年, 初版.
- (15) Alain-Fournier Lettres à sa famille et à quelques autres p. 534.
- (16) Ibid., p. 537.
- (17) Ibid., p. 538.
- (18) Ibid., p. 705.
- (19) Ibid., p. 541.
- (20) Jean Loize Alain-Fournier sa vie et Le Grand Meaulnes p. 435.
- (21) Alain-Fournier Lettres à sa famille et à quelques autres p. 543.
- (22) Ibid., p. 544.
- (23) Ibid., p. 545.
- (24) Jean Loize Alain-Fournier sa vie et Le Grand Meaulnes p. 436.
- (25) Ibid., p. 437-p. 440.
- (26) Alain Rivière Alain-Fournier Les chemins d'une vie p. 121.